

通常展示「書物で見る 日本文学史」資料一覧 第Ⅱ部

	名称	解説	
	Ⅱ 中古の文学		
		文学史では、平安時代を「中古」と呼びます。都が平安京に遷ってから、鎌倉幕府が成立するまでの約400年間で、ほぼ100年ごとに、初期・中期・後期・末期（院政期）に分けるのが一般的です。この時代は、天皇を中心とする貴族階級の人々が文学の主要な担い手でした。政治のおおよその形態により、天皇親政の初期、摂関政治の中期～後期、院政期に区分して、文学の変遷を見て行きます。	
	平安時代初期の文学	桓武天皇の延暦13年（794）の平安京遷都から、宇多天皇の寛平年間（889～897）頃までの、約100年間の文学。公的な文学として漢詩文が重んじられ、和歌はその陰に隠れた形になりましたが、日常的には和歌が変わらず詠まれていました。なお、新しいジャンルとして、物語と説話集が現れたことは特筆されます。	
	漢詩文	平安時代初期は、「文章経国」（漢詩文によって国を治める）の思想を背景に漢詩文が盛んに作られ、小野岑守撰『凌雲集』、藤原冬嗣ほか撰『文華秀麗集』、良岑安世ほか撰『経国集』のいわゆる勅撰三集が、810～20年代にあいついで成立しました。ほかに個人の詩文集として、宗教的な詩に特色のある空海の『遍照發揮性靈集』、都良香の『都氏文集』、島田忠臣の『田氏家集』などが伝わっています。	
	和歌	平安時代初期の和歌は、いわゆる六歌仙（遍昭・在原業平・文屋康秀・喜撰・小野小町・大伴黒主）に代表され、遍昭・業平・小町についてはその歌集が伝わっています。この時期の終わり頃には、現存最古の歌合である『在民部卿家歌合』や、『寛平御時后宮歌合』といった歌合も成立しました。大江千里の『句題和歌』は、漢詩句の内容を和歌に表現したものととして注目されます。	
	歌謡	平安時代初期頃に成立したと推定される歌謡として、神事、特に宮中の御神楽で用いられる神楽歌、諸社の神事で舞われた東遊（東国風の舞）に伴う東遊歌、地方民謡である風俗歌、民謡の歌詞に雅楽風の節付けをした催馬楽があります。和琴の伴奏で歌われる琴歌を収録した『琴歌譜』も、この時期に成立しました。	
	物語	『竹取物語』は、竹取の翁が竹の中から見つけて育てたかぐや姫が、美しく成長した後、貴公子たちの求婚を難題によって退け、天皇からの召しも断り、八月十五日に月の世界に帰って行くという伝奇的浪漫的な話です。『源氏物語』絵合巻において「物語の出で来はじめの祖」と言われているように、作り物語の最初の作品と考えられ、この時期の末頃の成立と推定されています。	
	説話集	『日本霊異記』は、正式な書名を『日本国現報善悪霊異記』と言い、薬師寺の僧景戒によって弘仁13年（822）頃編まれたもので、日本最古の仏教説話集です。雄略天皇から嵯峨天皇（在位809～823）の時代までの因果応報説話と霊験説話116話を、ほぼ年代順に、3巻に分けて収めています。	
	平安時代中期～後期の文学	醍醐天皇の昌泰年間（898～900）頃から、11世紀の末頃までの、約200年間の文学。『古今和歌集』の撰集を機に和歌が公的な位置を確立し、物語文学の代表作『源氏物語』が書かれるなど、王朝文学の最盛期と言える時代です。日記や随筆、軍記といった新たなジャンルも登場しました。和歌・物語・日記が盛んになった背景に、平仮名の普及があったことも忘れることはできません。	
	漢詩文	前の時期に引き続き、文人貴族の間で漢詩文が盛んに作られました。撰集として、代表的なものに紀貫之の『扶桑集』、高階積善撰の『本朝麗藻』、藤原明衡撰の『本朝文粹』があり、個人の詩文集として菅原道真の『菅家文章』などが伝わっています。藤原公任撰の『和漢朗詠集』は、収録された漢詩文の秀句が後代の文学に与えた影響の大きさにおいて重要です。	
	和歌	この時期は、和歌が漢詩文の下風を脱して、公的な文学としての地位を確立しました。その象徴としての最初の勅撰集である延喜5年（905）撰進の『古今和歌集』を初めとして、『後撰和歌集』『拾遺和歌集』の勅撰集が成立し、私撰集や個人の歌集が編まれ、歌合が盛んに催されました。代表的な歌人に、紀貫之・和泉式部らがあります。藤原公任の『新撰髓脳』などの歌論も書かれています。	
	日記・随筆	個人の日々の体験や心情を仮名文で綴った日記文学も、この時期に現れました。紀貫之の『土佐日記』、藤原道綱母の『蜻蛉日記』、『和泉式部日記』、『紫式部日記』、菅原孝標女の『更級日記』が代表的な作品です。清少納言の『枕草子』は、中宮に仕える女房としての生活を踏まえた日記的章段を含みつつ、多くの話題にわたり、随筆という文学形式を確立した点で特筆されます。	
	物語	平安時代中期～後期は、物語文学の最盛期と言ってよいでしょう。『伊勢物語』『大和物語』といった短章の歌物語、『うつほ物語』『落窪物語』といった長編の物語を経て、物語文学の代表作である『源氏物語』が書かれ、その影響を強く受けつつ、『浜松中納言物語』『夜の寝覚』『狭衣物語』が成立しました。短編物語集『堤中納言物語』も、特色ある作品として注目されます。	
	歴史物語	歴史物語は、物語の形式・文体で歴史を叙述するもので、宇多天皇（在位887～897）から堀河天皇の寛治6年（1092）まで（正編は後一条天皇の万4年（1027）まで）を扱った『栄花物語』が、最初の作品と考えられます。ついで文徳天皇の嘉祥3年（850）から後一条天皇の万寿2年（1025）までを扱った『大鏡【おおかがみ】』が書かれ、独自の批判的視点に特色を示しています（『大鏡』については、院政期の成立と考える説もあります）。	
	軍記	戦乱を題材にした文学である軍記も、この時期に現れました。関東の平将門の承平・天慶の乱（935～940）を扱った『将門記』、奥州の安部氏討伐の前九年の役（1051～62）を扱った『陸奥話記』があり、合戦とそれが起こるに至った経緯を叙述しています。	

通常展示「書物で見る 日本文学史」資料一覧 第Ⅱ部

名称	解説
説話・伝記集	<p>仏教系の説話・伝記集として、源為憲が撰じた説話集『三宝絵』、慶滋保胤が撰じた往生者の伝記集『日本往生極楽記』、鎮源が撰じた法華経とその信仰者の霊験・伝記集『大日本国法華経験記』があります。『三宝絵』は仮名文、他の二書は漢文で書かれています。いずれも、次代の『今昔物語集』の素材となった点でも文学史的に重要です。</p>
院政期の文学	<p>11世紀の末から12世紀の末までの、ほぼ100年間の文学。白河院の院政が始まった応徳3年(1086)と、鎌倉幕府が開かれた文治元年(1185)が、それぞれ始期と終期の目安になります。平安時代と鎌倉時代の橋渡しをした時期に当たり、中世文学の胎動期と位置付けることができます。</p>
漢詩文	<p>前代に比べると文学の中での相対的地位はやや低下したものの、漢詩文は依然として行われていました。撰集として『本朝無題詩』『本朝続文粹』『中右記部類紙背漢詩集』があり、個人の詩集として藤原忠通の『法性寺関白御集』などがあります。藤原基俊によって、『和漢朗詠集』を継いだ『新撰朗詠集』も編まれました。</p>
和歌	<p>院政期にも和歌は引き続き盛んで、勅撰集として『後拾遺和歌集』『金葉和歌集』『詞花和歌集』が成立したのを初め、私撰集がしばしば作られました。代表的歌人として、源俊賴・西行・藤原俊成らがあります。『堀河百首』以下の百首歌がたびたび編まれたこと、源俊賴『俊賴髓脳』・藤原清輔『奥義抄』などの歌学書・歌論書があいついで著作されたこともこの時期の特徴です。</p>
歌謡	<p>平安時代中期頃に起こった新しい歌謡である今様は、やがて貴族階級にも流行が及びました。後白河院撰の『梁塵秘抄』は、今様を初め「雑芸」と総称される流行歌謡を集大成したのですが、多くの巻が散佚し、一部の巻のみが伝わっています。宗教的な歌謡のほか、庶民の生活や心情を歌った歌謡も多く、広く親しまれています。平安時代後期以後、長編の仏教歌謡である和讃も多く作られました。</p>
物語・歴史物語	<p>院政期は、物語文学が衰退に向かった時期ですが、なおいくつかの作品が作られました。女装の男君と男装の女君の兄妹を主人公とする異色作『とりかへばや物語』や、『在明の別』などが伝わっています。また歴史物語として、『大鏡』の後を嗣ぎ、後一条天皇の万寿2年(1025)から高倉天皇の嘉応2年までを収めた『今鏡』が書かれました。作者は藤原為経(寂超)とする説が有力です。</p>
説話・伝記集	<p>全31巻1000余話から成り、日本の説話文学を代表する作品である『今昔物語集』は、この時期に成立しました。平康頼撰とされる『宝物集』は、院政期の終わりに原形ができたようです。紀伝道大江家の学者大江匡房の言談を筆録した『江談抄』も、説話に関して逸し得ない作品です。また、末法思想による浄土信仰を反映して、大江匡房撰『続本朝往生伝』・三善為康撰『拾遺往生伝』などがあいついで成立しました。</p>